

論 文

『賦光源氏物語詩』を読む(十)

— 夕霧・御法・幻・(雲隠)・兵部卿宮・紅梅・竹川 —

本 間 洋 一

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
教授

Reading the “Fu Hikaru Genji Monogatari Shi” (ten):

Yuugiri, Minori, Maboroshi, (Kumogakure), Hyoubukyounomiya, Koubai, and Takekawa

Yoichi Honma

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

【要旨】

中世前期に編纂された『賦光源氏物語詩』の解釈・注釈稿の第十稿。それぞれ巻を詠む漢詩(七律)が、どのように物語の内容と関連しているか明らかにする。

【キーワード】 源氏物語 漢詩 翻案物

三十九 夕霧

尋入松崎幽谷路	尋ね入る	松が崎の幽谷の路
只聞瀧水又虫声	只だ瀧水又虫の声を	聞くのみ
木枯吹払人猶少	木枯吹き払ひて	人猶し少らに
稲葉踏分鹿自鳴	稲葉踏み分け	鹿自らに鳴く
小野秋花纔駐艷	小野の秋花	纔かに艷を駐め
深宮夕霧遂殘名	深宮の夕霧	遂に名を残せり
塗籠戸是関岩戸	塗籠の戸は	是れ関の岩戸
山鳥含愁感思生	山鳥愁へを含みて	感思生る

(七律。声・鳴・名・生(下平声庚韻))

巻名は第六句に詠込まれている。この巻は、病の一条御息所が加持祈禱を受けるため、娘落葉の宮と共に小野の山荘に移り、八月中旬の頃、夕霧がそれを見舞うところから始まる。もとより彼の思いは落葉の宮にあり、思いを訴えるが、彼女は心を鎖す。夕方の霧に籠められて、帰路の覚束なさを理由に、その彼女のもとに留まり、手探りして宮を求めた夕霧ではあったが、彼女は身の過ちとして後悔する。また、母御息所に修法を行っていた律師も、夕霧と宮との関係を探し、御息所に漏らすのであった。母は娘の心中を察してあれこれ詮索もせず、届けられていた夕霧の文を見て返書を認める。母は彼の娘への思いを頼みにしたい気持ちもあり、心の程を確かめたかったのであるが、その文は彼の妻雲居雁によって奪われる。夕霧はその返書もできず、加えて宮のもとを訪れなかつたので、悲嘆した母御息所の病状は急変、死に至ってしまう。御息所葬送の後、夕霧は宮を慰めに訪れるが、一方で妻雲居雁は心穏やかではない。また、光源氏も夕霧と宮の噂を耳にするものの口出しできずにいる。御息所の法事を盛大に行った夕霧は宮をもとの一条宮に移す準備を進め、従兄の大和守の助力も得て、彼女を一条宮に迎え入れるが、その心は猶頑なである。夕霧は花散里・光源氏と対面後、雲居雁の嫉妬心を宥めようとするが、や

がて彼が宮と契りを交わすに至り、落胆した彼女は父致仕の大臣邸に去り、夕霧は困惑する。巻末には致仕の大臣の落葉の宮への圧力や、共に夕霧の子息を多く設けている雲居雁と藤典侍の歌の贈答が添えられている。さて、聯毎に訳出すると以下のようになるか。

(夕霧様は御息所様のお見舞いと) 松が崎の奥深い谷間の道に尋ね入られたのでございましたが、そこはただ滝の水音や虫の声ばかりが聞こえるようなところなのでございました。

木枯こがらしがあたりを吹き払い、人の気配も稀れで、稲の葉を踏み分けて鹿もおのずからに鳴くというたまたまでございます。

小野の山里の秋の花はわずかにその美しい名残りを留めておりまして、奥深い山里の住居に物さびしく立ち籠める夕霧と歌にも詠まれましたが、その夕霧を大將様(光源氏と葵の上の子)の名として後世に残すこととなったのでございました。

(落葉の宮様は一条宮に戻られますと) 塗籠ぬりごもに(鉤かぎを掛けて)籠かごもられました(それはまさに夕霧様が詠まれましたように) 関せきの岩門いわかどそのものでございまして、夕霧様は雌雄別々に寝ると云う山鳥のような愁しい物思いをなさっておられるのでございました。

首聯第一句は、一条御息所が療治の為に落葉の宮と共に籠る小野山荘を夕霧が訪れる場面、

八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもをかきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ……親しきかぎり五六人ばかり狩衣にてさぶらふ。ことに深き道ならねど、松が崎の小山の色なども、さる巖ならねど秋のけしきづきて……。

(4) 397頁13行〜398頁8行)

を下敷きにしており、第二句は、夕霧が落葉の宮に思いを訴える場面、

風いと心細う更ふけゆく夜のけしき、虫むしの音ねも、鹿かの音ねも、滝たきの音ねも、ひとつに乱いれて艶うなるほどなれば、ただありのあはつけ人だに寝ねざめしぬべき空のけしき……。

(4) 408頁1〜3行)

を意識しているものと思われる。つまり、御息所と落葉の宮の山里の住居の環境が描き出されているわけである。「尋入」は「さきぬやとしらぬ山ぢにたづねい、われをば花のしをるなりけり」(『千載集』60「尋深山花といへる心をよみ侍りける」撰政前右大臣兼実) などという含意で、歌にも用いられる表現。また、「幽谷」は「伐木丁々、鳥鳴嚶々、出自幽谷、遷于喬木」(『毛詩』小雅「伐木」) が有名か。漢詩では人里離れた深く薄暗い谷間のイメージなのだが、前掲原文には「ことに深き道なら」ず、「さる巖ならねど秋のけしきづきて」という次第であったから、ここは漢詩作者の思い入れということになるか。「只聞」はただ聞こえてくるばかりの意。「空山不見人、但聞人語響」(王維「鹿柴」)「不看細脚、只聞声」(『夜雨』「菅家文章」卷五) は類例。「瀧(滝)水」は「滝の水、このもと近く流れずはうたかた花も有りとみましや」(『小町集』70「遣水に菊の花浮きたりしに」)「風に散る秋の紅葉はのちつひに滝の水こそおとしはてけれ」(『躬恒集』740)のように滝の流水のこと。猶、「涼風写得巖松韻、暮雨儉將瀧水声」(小野美材「賦二秋思」)『新撰朗詠集』卷上・秋興205)と見えるのを柳沢良一『新撰朗詠集全注釈二』(新典社、平成23年)は漢詩解釈の作法に従って「瀧水声」の誤写としているが、『別本和漢兼作集』(卷八・409)『和漢兼作集』(卷六・618)でも「瀧水」とする。恐らく中国の川の名としてのそれや「瀧水」とは別に、文字通り王朝漢詩では、たきの流れと解釈していた可能性が高い(それは和習としても)と稿者は思う。草深い山里には「虫声」ももつともだが、秋の季節と病人との関わりで言えば、「新秋久病客、起步二村南道、尽日不逢人、虫声徧荒草」(「村居臥病三首」其二『白氏文集』卷一〇)という詩句もある。

領聯も小野山荘の佇まいであるが、場面はかなり飛んで、御息所が亡くなった後、夕霧が山荘の落葉の宮を氣遣って訪れた件、

九月十余日、野山のけしきは、深く見知らぬ人だにただにやはおぼゆる。山風にたへぬ木々の梢も、峰の葛葉も心あわたしうあらそひ散る紛れに、尊き読経の声かすかに、念仏などの声ばかりして、人のけはひいと少なう、木枯の吹き払ひたるに、鹿はただ籬のもとにたたずみつつ、山田の引板にも驚かず、色濃き稲どもの中にまじりてうちなくも愁へ顔なり。

(4) 447頁13行〜448頁7行)

とあるあたりを意識したものである。「木枯」は木を吹き枯らす風で歌語。「山里はさびしかりけり木枯しの吹く夕暮れのひぐらしの声」(『千載集』303藤原仲実)とあり、物淋しさを漂わせるもので、『千載集』ではこの歌の後に続いて哀しい鹿の鳴き声の歌群があり、例えば「さらぬだに夕べさびしき山里の霧のまがきにをしか鳴くなり」(311侍賢門院堀河)「をのへより門田に通ふ秋風に稲葉をわたるさをしかの声」(325寂蓮)などの作が見えるが、この詠歌の内容が物語本文や漢詩の表現にも頗る通うように感ずるのは稿者の僻目だろうか(猶、他の勅撰集ではこのような関連性は見出せない。『源氏』に通じていた俊成ならではというのはい過ぎか)。「吹払」は風が吹き払う意で、「雲暗空中清輝少、風来吹払看更皎」(嵯峨天皇「和內史貞主秋月歌」)『文華秀麗集』巻下)は一例。「人猶少」は人影の殆どない様。「人少庭宇曠、夜涼風露清」(夏夜宿直)『白氏文集』巻一九)とあり、「寂々松楹人到少、更排禪閣与僧談」(輔仁親王「山寺即事」)『本朝無題詩』巻一〇・729)などと云うに殆ど同じ。「稲葉」も刈り入れ前の稲を言い、歌語として『万葉集』以来詠み継がれて来ているが、鹿との関連で言えば前掲寂蓮歌や「旅寝して暁方の鹿の音に稲葉おしなみ秋風ぞ吹く」(『新古今集』92)「旅歌とてよみ侍りける」(源経信)などもある。「踏分」は勿論「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」(『古今集』215読人不知)を意識して用いた表現。「鹿鳴」は早く『毛詩』(小雅「鹿鳴」)に見える。ここでは鹿が鳴いて良き賓客を招き、酒肴を共にし宴樂する意であるが、本朝では秋の悲哀と重ね詠むのが一般であろう。

頸聯もやはり小野山莊周辺の景が詠まれていると言つて良いか。夕霧が落葉の宮に歌を贈る前段、

空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、
 蛸鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびける色もをかしう見ゆ。前の前栽の花ど
 もは、心にまかせて乱れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山おろし心すこ
 く、松の響き木深く聞こえわたされなどして……。

(④401頁15行〜402頁7行)

とあるあたりが第五句の背景で、第六句は前文に続いて、

……霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば、「まかでん方も見えずなりゆく
 は、いかがすべき」として、

山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して

と聞こえたまへば、

山がつのまがきをこめて立つ霧も心そらなる人はとどめず

ほのかに聞こゆる御けはひに慰めつつ、まことに帰るさ忘れはてぬ。「中空なるわざかな。家路は見えず、霧の籬は、立ちどまるべうもあらずやはせたまふ……」。

(④403頁1〜12行)

あたりの贈答歌が見られる部分を意識して詠むものであろう。中国古典詩で「秋花」と言えば先ず菊で、芦荻や蕎麦が次ぐであろうか。王朝漢詩では蕎麦は見えないが、菊や芦荻の類は見える。ここでは物語文中の「撫子」や「前栽の花ども」を指すことになる。「有秋花、逐暎露、輕葩細蕊」(源順「秋日遊白河院」同賦「秋花逐露開」詩序)『本朝文集』巻一一・323)は本朝の一例。「遶塚秋花少、顔色、細虫小蝶飛翺々」(東墟晚歇)『白氏文集』巻一二)と見える、どことなく物淋しいイメージの秋の花ではないように思う。「艶」は花の美しい色つや。「素艶風吹膩粉開」(戲題「木蘭花」)『白氏文集』巻二〇)「否艶桃嬌奪晚霞」(唐彦謙「曲江春望」)「聞得園中花養艶、請君許折一枝春」(紀齊名「恋」)『和漢朗詠集』巻下・恋783)などはその例。「深宮」は「唯向深宮望明月、東西四百廻円」(上陽白髮人)『白氏文集』巻三)「日暮深宮裏、重門閉不開」(嵯峨帝「長門怨」)『文華秀麗集』巻中)のように、忘れ去られた奥深い宮殿のイメージだが、ここでは山深い小野山莊を指している。「夕霧」は「殘雲収翠嶺、夕霧結長空」(唐太宗「遠山澄碧霧」)『初學記』巻二・霧)「雖愁夕霧埋人枕、猶愛朝雲出馬鞍」(大江朝綱「山居秋晚」)『和漢朗詠集』巻上・霧342)とあるように、夕べに立つ霧のことで、物語文中にも見えた通りだが、この詩句では主人公の人物名としての方に重点がある。「殘名」は「俊蔭は、はげしき浪風におほほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きける方の心ざしもかなひて、つとに他の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを弘め、名を残しける」(絵合巻②380頁6〜9行)と見えていたように、名声を後世に留める意。行基最期の弟子への戒めのことばにも「虎は死して皮を残す。人は死て名を残す」(『十訓抄』第四・一行菩薩の遺戒)なども用いられている。

尾聯は、整えられた一条宮に夕霧が待構える中、落葉の宮が泣く泣く帰還した場面が背景となつている。

宮はいと心憂く、情なくあはつけき人の心なりけりとねたくつらければ、若々

しきやうには言い騒ぐとも思して、塗籠に御座一つ敷かせたまて、内より鎖して大殿籠りにけり。

(④467頁12～15行)

彼女にとっては不本意なことで、夕霧を拒絶する態度である。彼は恨めしく思いつつ、それでも頑な彼女の心を解きほぐすべくつとめる条、

男君はめざましうつらしと思ひきこえたまへど、……よろづに思ひ明かしたまふ。山鳥の心地ぞしたまうける。からうじて明け方になりぬ。かくてのみ、事といへば、直面なべければ出でたまふとて、「ただいささかの隙をだに」と、いみじう聞こえたまへど、いとつれなし。

「うらみわび胸あきがたき冬の夜にまた鎖しまさる関の岩門、聞こえん方なき御心なりけり」と、泣く泣く出でたまふ。

(④468頁2～10行)

がもとなつてゐる。詩句は殆どが物語文と対応する和語であるが、それ以外の語について触れておきたい。「含愁」は愁しい思いを内にひめる意。「歎息下二蘭関」含愁奏雅琴「柳惲」長門怨「玉台新詠」卷五「弱歲辭漢関、含愁人胡関」(嵯峨天皇「王昭君」『文華秀麗集』卷中)はその例の一端。「感恩」は「詩人感物而思」(都良香「早春侍宴賦陽春詞詩序」『本朝文粹』卷八・214)ということで、感じ思うこと、思い。

四十 御法

紫上命如秋上露 紫の上の命は秋の上の露の如し
只思今世駐遺芬 只だ思ふのみ 今の世に遺芬を駐めんことを
每三陽節可供仏 三陽の節毎に 仏に供す可く

以兩樹花欲屬君 兩樹の花を以て 君に属せんと欲す
雁序半蘭催別緒 雁序半ば蘭けんとして 別れの緒を催し
鶯峯一乘讀真文 鶯峯一乘 真の文を讀へん

千年契断化煙後 千年の契り断ゆ 煙と化す後

片々纒残秋夕雲 片々として纒かに残る 秋夕の雲
(七律。芬・君・文・雲(上平声文韻))

卷名そのものは詠込まれていないが、敢て言えば「仏」や「一乘讀真文」が含む持つと言ふことになるうか。この巻は病が重り、死期の迫る紫の上の様子から始まる。出家は止められたものの、彼女は三月の桜の花盛りの折に『法華経』千部供養を二条院で行い、人々との今生の名残りを惜しむ。夏には、幼少の頃彼女に養育された明石の中宮の見舞いを受け、二条院を匂宮に譲ると遺言し、秋に光源氏や中宮と別れの歌を交わしてはかなくなった。彼女の死顔に見入る光源氏と夕霧であったが、即日葬儀が行われ、彼らは悲嘆にくれる。致仕の大臣(葵の上の兄)や世の人々も彼女への追慕深く、秋好中宮の弔問の文(ふみ)に心動かされつつ、光源氏は出家を思い動行につとめ、一方で追善法要が夕霧により行われる。聯毎に通釈を掲げてみよう。

紫の上様のお命はさながら秋の上の露のごとく(はかないもの)でございまして、ただただ、今生に残り香をとどめようとなさるばかりなのでございまして。

(紫の上様は)毎年春の(花の)季節毎に、仏様にお供え下さるべく、(この二条院の)紅梅と桜をもつて匂宮様に付託されたのでございました。

秋も中ば過ぎようという(八月)頃、(紫の上様は、光源氏や明石の中宮様と)永遠の訣別の一時をお持ちになり(世を去られました)が、その日のうちに葬儀も営まれて、紫の上様への追慕頻りな夕霧様も光源氏様も)御仏の最も尊い教えを有ち成仏なさるようになつたことば(阿弥陀仏)を称え念じ(『法華経』なども読誦)なさつたことばでございました。

(光源氏様は紫の上様と)千年も一緒にと思ひ交わしていらつしゃいました、その願いが断たれておしまいになり、紫の上様が煙となつて(天に昇つて)しまわれた、その後、かたわれにわずかに残るのは秋の夕方の雲なのでございました。

首聯は「いとあつしく」(④493頁2行)「いとどあえかになりまさりたまへる」(同上5行)紫の上の余命短きことを詠むもの。彼女が「残りすくなしと身を思はる」(④498頁5行)と自覚し、せめてこの世に良き余波をと思つたのは無理なことと思ふ。詩句は直接的には彼女の

おくと見るほどはかなきともすれば風にみだるる秋のうは露、

(④505頁2～3行)

と詠んだ歌をふまえる。人命の儂さは「人生如朝露」(『漢書』蘇武伝)「薤上朝露何易晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸」(『古今注』「薤露行」)。陸機「挽歌詩」(『文選』卷二八)の李善注所引)などと見え、「ありさりて後も逢はむと思へこそつゆのいのちも継きつつ渡れ」(『万葉集』3933平群女郎)「人之在世也、殆如花上之露」(兼明親王「兔裘賦」『本朝文粹』卷一・13)他本朝でもよく詠まれ「鳴き渡る雁の涙や落ちつらむ物思ふやどの萩の上の露」(『古今集』221詠人不知)と萩と露を結びつけた日本らしい表現あたりも想起されることなるうか。「今世」は今の世の中、ここでは今生というに同じ。「生乎今世、反古之道」(『中庸』)「豈非今世述君美、便是当来讚仏詞」(具平親王「近來播州書写山中有性空上人者……」『本朝麗藻』卷下)はその例の一端。「遺芬」は後に残る良いかおり、後世に残る誉れ、遺芳というにほぼ同じ。「韓寿遺芬留翠箔、荀君餘氣染羅帷」(『早夏同賦』「芳樹垂綠葉」『江吏部集』卷下)は一例。

頷聯は死期迫る紫の上が、二条院を匂宮に譲るべく遺言する次の場面を背景とする。

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。

(4) 503頁1〜5行)

「三陽節」は春の季節のこと。「一年之美景、莫先自春、三陽之佳期、尤在其暮」(源順「暮春……賦花光水上浮」詩序)『本朝文粹』卷一〇・301)「穆々三春節、天氣暖且和」(『初学記』卷三・春所引樂府詩)というに同じ。「供仏之誠、唯志是尽」(大江朝綱「為中務親王家室四十九日願文」同上卷一四・423)は「供仏」(仏様におそなえる)の例。「兩樹」は「手栽兩樹松、聊以當嘉賓」(『寄題整屋前双松』『白氏文集』卷九)とあり、二本の木の意。ここでは物語文中に見える紅梅と桜を指すことは勿論である。「属君」は君にゆだねる意。「旧峯松雪旧溪雲、悵望今朝遙属君」(『和錢員外青龍寺上方望旧山』『白氏文集』第一四)「水石煙霞一属君、家資疎薄業殊群」(橋在列「又」『扶桑集』卷七)と見えている。

頷聯は紫の上の亡くなった糸を意識していよう。それは秋八月十四日のことであり、その直前に彼女は光源氏や明石の中宮とお別れの一時を持っており、「萩の

うは露」を詠む和歌を贈答し合う(首聯参照)。彼女亡き後に、夕霧は「阿弥陀仏、阿弥陀仏」(4) 512頁10行)と唱えて数珠を繰り、「定まりたる念仏をばさるものにて、法華経など誦せさせ」(4) 512頁15行〜513頁1行)なさり、光源氏も「阿弥陀仏を念じ」(4) 513頁12〜13行)て、「仏の御前に人しげからずもてなして、のどやかに」(4) 517頁15行〜518頁1行)勤行し続けている様子をおまえているのであろう。猶、三月十日桜の花盛りの頃、紫の上は二条院で「法華経」千部供養を行っていたが、その条に「新こる讚嘆の声も、そこら集ひたる響き、おどろおどろしき」(4) 496頁13行)程であったという、その先行記事も重ねて、仏の教えの尊さを印象付けているようでもある。「雁序」は雁が順に列を成して飛ぶ様を言い、ここは「九秋驚雁序、万里狎漁翁」(杜甫「天池」というように来雁(『礼記』月令「仲秋之月鴻雁来」)を指す。「半闌」は秋も中ばを過ぎようとしている意。前述したように時は八月十四日であった。「別緒」は別れ難い心、別れの悲しい思い。「二星適逢、未叙別緒之依々之恨」(小野美材「代牛女惜暁更」詩序)『和漢朗詠集』卷上・七夕213『本朝文粹』卷八・224)「向何方而陳別緒、恨無心於煙霞」(紀齊名「花下惜別」『新撰朗詠集』卷下・饒別595)などに見える。「鷺峯」は靈鷲山で、釈迦が「法華経」を説いたと伝える山。「一乘」は仏の教えを車に譬えたもので、人々を悟りに導く乗物。ここでは「法華経」を指し、「東方五百之塵、長懸鷺峰之月」(大江以言「賦壽命不可量詩序」『本朝文粹』卷一〇・280)『新撰朗詠集』卷下・仏事555)「已終未習千年役、儻得難逢一乘文」(慶滋保胤「採菓汲水詩」『和漢朗詠集』卷下・仏事599)はその語例。「真文」は經典に見える真理の文言、御仏の教えの意であり、「法華経」をここでは云うものと考えられる。

尾聯の第七句は、紫の上の死を前にして、光源氏が「千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心にかなはぬことなれば」(4) 505頁12〜13行)、或はその死後に「千年をももろとも」と思ししかど、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける」(4) 518頁1〜3行)と思つたものの空しくなつてしまったという記述と、彼女の葬儀が、

はるばると広き野の所もなく立ちこみて、限りなくいかめしき作法なれど、いとはかなき煙にてはかなくのほりたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ。

(4) 510頁13〜15行)

と行われた場面を背景とする。末句の風景は物語文中には見えないようだが、「あはれ君いかなる野辺の煙にてむなしき空の雲となりけん」(『新古今集』821弁乳母)

の如く亡き人を雲と為す歌や、加えて「さびしさに宿をたちいでてながむればいづくも同じ秋の夕暮れ」〔後拾遺集〕333良暹法師と秋の夕暮れの寂寥を詠ずるような作も喚起されて、紫の上を亡くした喪失感を強く印象付けているようでもある。「千年」は永遠の年月というに等しい。「かくのみにありけるものを妹も我も千歳のごとく頼みたりけり」〔万葉集〕473大伴家持「世の中にさらぬ別れのなくも千歳の千代もと嘆く人の子のため」〔古今集〕901在原業平などの歌には千年も共に生きたく思ふはかない人の願いが垣間見れよう。それは中国古典詩でも同様で、例えば「与君相向転相親、与君双棲共一身」、願作「貞松千歳古」、……「秋万古北邱塵」〔劉廷之「公子行」〕のように、貴公子と美人の愛を詠んだものの中にも見えている。「化煙」には葵の上の死を悼む「なき人の別れやいとど隔たらむ煙となりし雲居ならでは」〔須磨②169頁14〜15行〕や「恋ひわびてながむる空の浮雲やわがしたもえの煙なるらん」〔金葉集〕435周防内侍等を想起する。詠歌には人が煙となるイメージが揺曳していると思うが、それは茶毘に付す時の煙雲が、人の死を表象するものであるからであろうか。「片々」はちぎれ雲の様。「片々、行雲著、蟬鬢、織々初月上三鴉黄」〔盧照鄰「長安古意」〕「片々、雲膚遮、漢合、蕭々雨脚繞、檐飛」〔藤原篤茂「雨来花自綻」〕「作文大体」などと雲に用いるのも表現の一般であろう。

四十一 幻

上下四虚遙走幻	上下四虚	遙かに幻を走らしめ
尋冥路可招幽霊	冥路を尋ねて	幽霊を招くべし
歡心異我天河鵲	歡心我と異なる	天河の鵲 <small>かみせせ</small>
別思傷誰夕殿螢	別思誰をか傷む	夕殿の螢
鶯不知憂霞底囀	鶯は憂へを知らずして	霞底に囀り
花猶含咲露中馨	花は猶し咲を含みて	露中に馨し
于朝于暮涙無尽	朝な暮なに	涙の尽くこと無きも
夢裏争看平日影	夢の裏に争でか看ん	平日の影

（七律。靈・螢・馨・形（下平声青韻））

卷名は第一句に詠込まれている。この巻は光源氏五十二歳の春、紫の上を失い悲しみにくれる彼の姿が描かれる。彼女を偲びその苦悩の程を想いやり、後悔は深い。そして、中納言の君や中将の君らを御前に召し、これ迄の自らの所業を顧み、「この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあるまじう、高き身には生まれな

がら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかな」〔452頁9〜11行〕などと述べる。何とも身勝手な感慨に耽つているとしか思えないのだが、ともあれ、涙にくれる身を恥じ、人と対面せぬ彼は、紫の上遺愛の紅梅・桜を世話する匂宮を愛しみ春の庭に時を過ごす。女三の宮（入道の宮）や明石の君を訪れても亡き女への思いを募らせるばかりである。五月雨の頃、息夕霧と故人を偲び、夏の虫、七夕の逢瀬を歌に詠み、一周忌の供養をへて、十月の来雁に「大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ」〔445頁6〜7行〕と巻名にもなった歌を詠む。更に五節の頃をへて、亡き人の残した文を処分し、俗世を捨てる覚悟を固め始める。師走の仏名会の折、光源氏は久しぶりに人々の前に姿を現わし、「わが世も今日や尽きぬる」〔450頁8〜9行〕と詠じ、新年の手配などして終っている。聯毎に訳を掲げると次のようにならうか。

（光源氏様のお悲しみの深さを思えば、あの「長恨歌」のように）天の上下四方、遙かに幻術の士を走らせ、あの世を尋ねさせ、亡き人の魂を招きよせるのもよろしいでしょう。

天の河に鵲が渡す橋により（天上界での牽牛・織女の七夕の）逢瀬のよろこびは、我が（光源氏様の今抱いておられる）御心とは（全く）異なるものがございますし、夕殿に螢が飛んで、（光源氏様が）別れの恨みを抱え誰を傷むのか（と申しますと）亡き紫の上様に他なりません。

（亡き紫の上様の遺愛の紅梅のもとに）鶯は（光源氏様の）憂へも知らずげに訪れ、霞のたなびく中に囀っておりますし、桜の花は一層美しく開いて、（涙の）露の中にかぐわしくかおっておりますのでございました。

朝も夕も（光源氏様の）涙の尽きることはいませんが、その夢の中にも、紫の上様の生前の御容貌を御覧になることはいないのでございました。

首聯は、紫の上を失った光源氏が秋の来雁を見つつ、「大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ」〔454頁6〜7行〕と方士に亡き魂を尋ねて欲しいと詠む場面を背景としている。勿論よく知られているように彼と紫の上の関係には、楊貴妃を失った玄宗皇帝の喪失感が重ねられている。かの「長恨歌」〔白氏文集〕卷一二に「悠悠生死別經年、魂魄不曾入夢、臨邛道士鴻都客、能以精誠致魂魄、為感君王展轉思、遂教方士殷勤覓、排空馭氣奔如電、昇天入地求之遍、上窮碧落下黃泉、兩處茫茫皆不見」とあるあたりを殊に意識したものであろう。死別から歳月を経ても貴妃の魂は玄宗の夢にも

現われず、死者の魂を呼び寄せるという道士に彼女の魂を求めさせる。道士は天空をかき分け、雷電の如くに奔走し、天地をくまなく駆けまわるといふ幻想的な詩句が漢詩作者の脳裏に在ったわけである。「上下四虚」とは天空の四方上下、到るところすべてという意味合い。「四虚」はもともと『莊子』(天運)などに見える語だが、直接的には陳鴻「長恨歌伝」に「旁求四虚上下、東極大海」と道士が貴妃の魂を求め奔走する中で用いられている句に依っている。「幻」はここでは幻術師(道士)の意。「冥路」は冥界(への道)のことで冥途に同じ。「綴玉聯珠六十年、誰教冥路作詩仙」(唐宣宗「弔白居易」)とある。「幽霊」は死者の魂。「幽霊髻、歎我儀樽」(謝惠連「祭古冢文」)『文選』卷六〇とある李善注に「魏太祖祭橋玄文曰、幽霊潜翳。李康髑髏賦曰、幽魂髻、忽有二人形」と見え、本朝でも「香則求難陀此岸之煙、花則擎樹提後園之萼。以此惠業一訪彼幽霊」(大江朝綱「為中務卿親王家室四十九日願文」)『本朝文粹』卷一四・423)などと用いられている。

領聯の第三句は、首聯の少し前、夏と七夕の時節に光源氏が紫の上を偲ぶ次の場面を背景とする。

七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもしたまはで……星逢ひ見る人もなし。……前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見たさるれば、出でたまひて、

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ

(④543頁5〜12行)

第四句は夏に前者の直前に、

螢のいと多う飛びかふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の、古言もかかる筋にのみ馴れたまへり。

夜を知る螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

(④543頁1〜4行)

とあるところをふまえている。「歡心」は喜びの心、うれしい気持ち。「別來経二年歳、歡心不可凌」(謝惠連「代古」)『玉台新詠』卷三「今年四月一日陰雨……於戲、君臣合体、朝野歡心」(『江吏部集』卷上所収詩題)はその例。「天河鵲」は七夕に鵲が天の川に橋を懸けるといふ故事による表現。例えば「愁随織女」

帰(李嶠「鵲」)の注に「風俗記曰、七月七日烏鵲填河成橋、織女渡之」(李嶠「橋」詩注も同類)と見える。また、「長思不能寝、坐望天河移」(張率「擬樂府長相思二首」其二「玉台新詠」卷九)「天河七夕報初涼、牛女交歡聞歌光」(「失題」)『田氏家集』卷上)は「天河」の例。「別思」は離別したあとの思いで、「宿醒和別思、目眩心忽々」(和親「寄樂天」)『白氏文集』卷五二「年々別思驚秋雁、夜々幽声到晚鷄」(具平親王「擣衣」)『和漢朗詠集』卷上「擣衣350」と見える。「夕殿螢」は光源氏が物語文中で口ずさむ「長恨歌」の一節「夕殿螢飛思悄然、秋燈挑尽未眠」をふまえること言うまでもない。猶、白詩の表現は更に遡れば、人を思う心尽させぬ様を詠じた「夕殿下珠簾、流螢飛復息」(謝朓「玉階怨」)『玉台新詠』卷一〇)を継承するものである。

頸聯は紫の上遺愛の紅梅・桜を大切に世話する句宮、それを愛しく見守る光源氏が描かれる次の場面を背景に詠まれている。

二月になれば、花の木どもの盛りなるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覽す。

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来ある鶯

と、うそぶき歩かせたまふ。

春深くなりゆくまに、御前のありさまいにしへに変わぬを、めでたまふ方にはあらねど、静心なく……山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。

(④528頁9行〜529頁6行)

「霞底」はかすみの中の意。こうした「底」の用法は中国古典詩にも例はあるが(『詩詞曲語辭匯釈』卷一・底)、本朝では「課詩難繫片霞底、伴客豈拘遲日前」(惟宗孝言「惜残春」)『本朝無題詩』卷四・227)「花色春深林霧底、鐘声日暮野煙中」(藤原敦基「春日於棲霞寺即事」)同上卷九・605)のように、院政期の漢詩で定着した表現で、詩句ではしばしば「中・前」が対語となる。猶、「なにごとを春の日くらしおもふらん霞の底にむせぶうぐひす」(清輔集)11「鶯」。下句は「千載佳句」卷上・早春3『和漢朗詠集』卷上・鶯65に所収される元稹句「咽霧山鶯啼尚少」による)のように和歌世界にも引き継がれていることも知られる。「含咲」は花の咲き綻ぶこと。「庭梅已含笑、門柳未成眉」(大津首「春日於左僕射長宅宴」)『懷風藻』とある。今日の国語では咲と笑は別字であるが、本来

は異体字関係に過ぎない(『平禄字書』)。

尾聯の第七句は、朝夕に泣き暮らし、涙尽させぬ光源氏の様子を詠む。幻の巻そのものが、彼のそんな有様を描いたもののだが、例えば「つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな」(④542頁14〜15行)「七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ」(④543頁11〜12行)の歌や、紫の上の遺文を見て「それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎に流れそふ」(④547頁7〜8行)などを敢て挙げてよいかも知れない。また、第八句、夢にも紫の上を見ないということなので、首聯で挙げた「夢にだに見えぬ魂」(④545頁6行)と「魂魄不曾来入レ夢」(「長恨歌」をふまえたものである。「涙無尽」は涙は尽きない意だが、「此恨綿々無レ尽期」(同上)と殆ど同意とみて良い。「夢裏」は夢の中に「与レ師俱是夢、夢裏暫相逢」(「天竺寺送三上人帰廬山」)『白氏文集』卷五三)「夢裏身名旦暮間」(「元稹」幽棲)『千載佳句』卷下・仙境¹⁰⁷⁴『和漢朗詠集』卷下・仙家⁵⁴⁰)はその用例。「争看」について、前掲通釈では、どうして見る必要がある、と反語で訳出したが、願望の意を込めて、何とかして紫の上の生前の姿をみたいものである、と訳すこともできようか。「平日」は常日頃、日常で、「形」は容貌を指す。「今實已四十二矣。白髮生レ鬢、所慮日深、不復若平、日之時也」(「呉質」答魏太子「賤」『文選』卷四〇)とあるが、ここで稿者は、亡き恋人の墓前でその魂に向って強く再会を訴える王道平の言葉「汝有レ靈聖、使我見、汝生、平之面」(『搜神記』卷一五)を喚起してしまう。生前の日常の顔(や姿)をもう一度見たいと願うのは、相手への強い慕情の表現に他ならないのだ。

四十二 雲隱 〈欠詩〉 * 卷名のみ

四十三 匂兵部卿宮(又号二薫中將)

光隠以降思彼跡	光隠れてより以降	彼の跡を思ふに
在朝卿相更無俸	在朝の卿相に	更俸しきもの無し
薫中将袖梅花露	薫の中將が袖は	梅の花の露
匂大王籬菊蕊秋	匂の大王の籬は	菊の蕊の秋
賓客宴筵南向坐	賓客の宴筵	南のかたに向かひて坐し
仏陀淨刹外何求	仏陀の淨刹	外に何ぞ求めん
賭弓歸路遊黃閣	賭弓の歸路に	黃閣に遊び
雪夕逍遙樂自由	雪の夕に逍遙して	自由を楽しめり

〔七律。俸・秋・求・由(下平声尤韻)〕

卷名は領聯に「匂大王」(乃至「薫中將」と詠込んでいる。この巻は、光源氏亡き後の人々の動静が語られている。まず、匂宮(帝と光源氏の女明石の中宮の間に誕生)と薫(柏木と女三の宮の間に誕生)が「とりどりにきよなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさま」(⑤17頁5〜6行)と、世評の高いことが語られ、今上帝や右大臣夕霧(光源氏と葵の上の間に誕生)の子息にも触れ、主亡き後さびれることを厭い、夕霧が六条院(亡紫の上の居処で女一の宮や二の宮が住み、落葉の宮も迎えられる)と自邸三条殿とに通い住むことが記される。冷泉院や秋好中宮の後見をえて薫は元服も終え侍従、右近中將と榮進する。そして、「あやしまで人の咎むる香にしみたまへる」(⑤27頁8〜9行)薫中將と、「よろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざには合はせいとな」(⑤27頁10〜11行)む匂兵部卿宮は互いにライバルであり、また親しく交わる存在であった。薫は匂宮とは対照的に、世を厭い女性に強い関心を持つタイプではないが、女性からは魅力に溢れ、「見る人みな心にはからるるやうにて見過ぐる」(⑤31頁10〜11行)存在であった。賭弓が行われて夕霧方が勝ち、還饗が六条院で行われることになり、負けた側の薫も招かれる。雪の散らつく黄昏時、仏の国かと思われるその会場に來り、多くの貴頭を集えて華やかな宴が始まる。舞人達の袖翻る中、薫のかおりもそれとばかりに立ちかおるのであった。以下聯毎に訳を施すこととしよう。

光源氏様がおかれになられてからというもの、(人々は)かの方をお慕い申すばかりで、朝廷の公卿の中にかの方と肩を比べられる御方などおられませぬ。

薫中將様(の御身にそなわる香りのすばらしさ)は、梅の花の(かぐわしい)雫の如くでございまして、匂宮様は(と言えば)籬に咲く菊花かぐわしい秋の風情というところでございましょうか。

(賭弓の還饗が六条院で催され)お客様方は、南向き(あるいは北向き)におすわりになっておられます。(六条院は)御仏の浄土の地(ともいふべきすばらしい処)でございまして、この地の外に求める必要などございませぬでしょう。

賭弓の歸路に、右大臣(夕霧)様の邸宅に遊び、雪の散らつく暮れ方に、気儘に自由な一時を楽しんだこととございました。

首聯は巻頭の「光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり」(⑤17頁1〜3行)をふまえた表現。「隠」は死亡を暗示する本朝の用法。「以降」(「色葉字類抄」)「奮然、天祿以降、有レ心二渡海」(慶滋保胤「奮然上人入唐時為レ母修レ善願文」)「本朝文粹」卷一三・411)は以後の意。「在朝」は朝廷内に在ること。「遲暮交親雲意淡、在朝故旧醴香濃」(兼明親王「題二山亭壁」)「新撰朗詠集」卷下・交友⁶⁸⁸)「昔与二微之」在朝日、同畜二休退之心」(「白氏文集」卷七所収詩題より)はその例。「卿相」は公卿に同じで、本朝では大臣、大中納言、参議を指す。「漢庭卿相皆知己、不レ薦二揚雄」欲レ薦レ誰」(「和二談校書秋夜感懷」呈二朝中親友」)「白氏文集」卷一三)「王侯卿相及文武百官」(「統日本紀」養老五年十月十三日条)と見える。「侔」は同等の意。「公年始弱冠、年勢不レ侔」(任昉「王文憲集序」)「文選」卷四六)「車服邸第、与二大長公主」侔」(陳鴻「長恨歌伝」)などと用いられる。

頷聯は、薫と匂宮の香りを比較対照する次の条が背景であろう。まず、薫の方が、香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。……うち忍び立ち寄らむ物の隈もしるきほのめきの隠れあるまじき……この君のはいふよしもなき匂ひを加へ、御前の花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとの薫りは隠れて、なつかしき追風ことにをりなしながらなむまさりける。かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを……。

(⑤26頁11行〜27頁の9行)

と描かれ、引続いて匂宮は、

兵部卿宮なん他事^{ことごと}よりもいどましく思して、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前栽にも、春は梅の花園をながめたまひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿^{させしか}の妻にすめる萩の露にもをさをさ御心移したまはず、老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れのころほひまで、思し棄てずなどわざとめきて、香にめづる思ひをなん立てて好ましようおはしける。

(⑤27頁9行〜28頁2行)

と記され、「世人は、匂ふ兵部卿宮、薫る中将と聞きにくく言ひ」(⑤28頁8〜9行)たてるのだという内容である。「籬」は物語文中の「御前の前栽」「花園」の反映であろうが、「采菊東籬下」(陶潜「雜詩」)「文選」卷三〇)の表現以来、秋の菊とは密接な関係を有する語彙となった。「眼看二菊蕊」重陽涙、手把二梨花」寒食心」(「陵園妾」)「白氏文集」卷四)「昔花千片擁二秋雪」菊蕊数叢留二曉星」(中原広俊「暮秋即事」)「本朝無題詩」卷五・305)は「菊蕊」(菊の花)の例。

頷聯は、次の巻末の六条院で行われた還饗^{わんじやう}の宴席の場面と関わるであろう。

……いざなひたてて、六条院へおはす。道のややほどふるに、雪いささか散りて、艶なる黄昏^{たふがれ}時なり。物の音をかしきほどに吹きたて遊びて入りたまふをげにここをおきて、いかならむ仏の国には、かやうのをりふしの心やり所を求めむと見えたり。寝殿の南の廂^{ひだり}に、常のごと南向きに中少将着きわたり、北向きに対へて、垣下の親王たち、上達部の御座あり。御土器などはじまりて、もおもしろくなりゆくに……。

(⑤34頁3〜11行)

第五句は賓客として招かれた薫らが南向きに宴座についた条、また、第六句はその条の少し前の、六条院の他に浄土に勝る地はなく、求められもしないという条をふまえている。「賓客」はお客様。「賓客亦已散、門前雀羅張」(「寓意詩五首」其二)「白氏文集」卷二)など白詩に類出する語である。「宴筵」は宴席に同じ。「詔」侍臣預二宴筵」者上、献二和歌」(紀淑望「古今和歌序」)「本朝文粹」卷一一・342)と見えている。「淨利」は寺院(の清浄な境域)を言う。ここでは物語文中の「仏の国」を指して云う。「思二其後世」定到二淨利」(「母堂為二先考」修善願文」)「江都督納言願文集」卷五)「弥陀の淨利に往生せん」(「源平盛衰記」卷三九・維盛於二粉河寺」調二法然房」事)はその用例。「外何求」は他に求めない、求める必要ない意。「琴書中有レ得、衣食外何求」(「履道新居二十韻」)「白氏文集」卷五三)「百憂中莫入、一醉外何求」(「想二東遊」五十韻)同上卷五七)などと白詩にあるのに依り、殊に後者は『類聚句題抄』(143・後中書王)の詩題にもなっている。

尾聯も頷聯と殆ど同じ条に関わり詠まれている。第七句は、

賭弓の還饗の設け、六条院にて、いと心ことにしたまひて、親王をもおはしまさせんの心づかひしたまへり。

(⑤33頁1〜3行)

を念頭に詠じており、末句は頸聯の件に挙げた「雪いささかに散りて、艶なる黄昏時なり……遊びて入りたまふ」の一節を意識したものである。「賭弓」は天皇臨席の下、左右に分かれた近衛府、兵衛府の舎人らによって行われる競射の催しのこと。「還饗」は賭弓終了後に勝利した側の大將(物語中では夕霧)がもてなす宴のこと(山中裕『平安朝の年中行事』塙書房。『源氏』の古注にも詳注があるので参照されたい)。「黄閣」は大臣の唐名で、ここでは夕霧を指す。黄閣も同じ。「漢旧儀曰、丞相黑両車轡……聽事閣曰『黄閣』」(『芸文類聚』卷四五・丞相)と見え、「方今講芸之場者、是外祖大相国之旧居也。昔為『黄閣』、今為『青閣』」(大江匡衡「冬日陪東宮聽第一皇孫初読御注孝経」詩序)『本朝文粹』卷九・258)と用いられる。「逍遙」は『莊子』(逍遙遊)に出づる語というが、心のままに気儘に過ぐすという程の意。「自由」は心のままにする様。「專掌」図書「無過他、遍尋山水」「自由身」(閑行)『白氏文集』卷五五)他白詩によく見える語で、本朝でも「信脚涼風得自由」、弘文院裏小池頭(「秋夜宿弘文院」『菅家文章』卷二)等多く見える。

四十四 紅梅(匂兵部卿宮并之)

七間寢殿構尤広 七間の寢殿 構へ尤も広し
 彼笛和箏動意機 彼の笛箏に和して 意機を動かす
 父垂高槐纏紫綬 父は高槐を垂いで 紫綬を纏ひ
 女装穠李入青闌 女は穠李を装ひて 青闌に入る
 風牽梅艶書雖到 風は梅艶を牽いて 書到ると雖も
 鶯駐竹園使独帰 鶯は竹園に駐まりて 使ひ独り帰る
 情憶此宮残貴種 情憶ふ 此の宮の貴種を残し
 阿難光似世尊輝 阿難の光の 世尊の輝きの似くならんことを
 (七律。機・闌・婦・輝(上平声微韻))

巻名は第五句に「梅」だけが詠込まれる。この巻の主体は按察大納言だが、匂宮に関わって展開する内容となっている。かの大納言は故致仕の大臣の子で柏木の弟である。故北の方との間に二女(大君と中の君)、後妻の真木柱(故螢兵部卿宮の妻)との間にも男君を設けていた。また彼は、真木柱と故兵部卿宮が成した娘(宮の御方)も引取り大切に育てている。彼は裳着をすませた同じ年頃の三人の姫君の嫁ぎ先を思案し、大君を春宮に入れ、中の君を匂宮へと思う。だが、匂宮は宮の御

方に心を寄せ、頻りに文を届けてくる。彼女自身はしかし気乗りがせず、母真木柱も彼の色好みを耳にして前向きになれずにいるのであった。以下聯毎に通釈することとしよう。

(按察大納言様御一家がお住まいになる)七間の寢殿の構造は大変広いものでございました。(真木柱と大納言様の間に生まれなされた)若君が(父に促されて宮中に参上する前に)上手に笛をお吹きになりました(宮の御方と合奏なさり、父上様は)心を動かされ(口笛を合わせられ)たのでございました。

父君大納言様は、高き身分の大臣家を継ぐ(二番目の)御息で紫色の印綬を身に帯びる御方でございまして、その姫君(大君)も桃李の花のような美しさでございましたから、東宮様にかしずかれなされたのでございました。

風がにおいやかな梅の花に吹き(中の君もかぐわしく美しくいらつしやるので、大納言様は思いを匂宮様にお伝えする)お手紙を差上げなされたのでございましたが、鶯(とも言うべき匂宮様)は(当然訪れてしかるべき梅の花園ではなく、何と)竹の園(の宮の御方)に心をとどめていらつしやいまして、(宮の御方からは返書もなく)使いはひとりむなしく帰るばかりでございました。

よくよく思いますに、この匂宮様こそは尊貴な身分の御方(光源氏様)の面影を残していらつしやる。(亡き仏の御弟子の)阿難の放つた光は、さながら(再来した)御仏の輝きのようにであった(と申しますが、匂宮様もその阿難のような存在な)のでございます。

首聯の第一句は、成長した娘達の為に大納言が邸宅を増築した件、

君たち、同じほどに、すぎすぎおとなびたまひぬれば、御裳など着せてまつりたまふ。七間の寢殿、広くおほきに造りて、南面に、大納言殿、大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたまつりたまへり。

(⑤40頁9〜13行)

によつてゐる。第二句はかなり飛んで、宿直に参内しようとする若君に大納言が笛を吹かせる場面である。

若君、内裏へ参らむと宿直姿にて参りたまへる、……「笛すこし仕うまつれ。

ともすれば御前の御遊びに召し出でらるる、かたはらいたしや。まだいと若き笛を」とうち笑みて、双調吹かせたまふ。いとをかしく吹いたまへば、「けしうはあらずなりゆくは、このわたりにておのづから物に合はするけなり。なお掻き合はせさせたまへ」と責めきこえたまへば、苦しと思したる気色ながら、爪弾きにいとよく合はせて、ただすこし掻き鳴らひたまふ。皮笛ふつつかに馴れたる声して。

(⑤47頁1～13行)

未熟と思つていた若君の笛が上手だったので、宮の御方の琴との合奏を所望した大納言は、輿に乗じて自らも口笛を吹いたりしている。「動意機」は心を動かす意。「機」ははたらき、活動の意で、意機は心機に同じ。恐らく「動心機」と表現したかったのではないかと思うが、本句六字目は仄声字が要められるので、「心」に換えて「意」を用いたのだろう。「棲霞観裏動心機」(大江佐国「春日於栖霞寺」即事)『本朝無題詩』卷九・606)「芳辰過半動心機」(藤原忠通「春日富家別業即事」同上卷六・416)というに同じである。

領聯は按察大納言の出自と娘(大君)の春宮への輿入れを説く。第三句は、大納言が、

按察大納言と聞ゆるは、故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督(柏木)のさしつぎよ……。

(⑤39頁1～3行)

という人であり、高貴な家に育ったことが説かれ、幼少の頃より利発で帝の寵愛も受けていたとも云う。その彼には年頃の娘が三人いたが、第四句は、

例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く、内裏、東宮より御気色あれど、内裏には中宮おはします、いかばかりの人はかの御けはひに並びきこえむ、さりとて、思い劣り卑下せんもかひなかるべし、春宮には、右大臣殿(夕霧)の並ぶ人なげにてさぶらひたまへばきしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と思したちて、参らせたまつりたまふ。十七八のほどにて、うつくしうにほひ多かる容貌したまへり。

(⑤41頁2～14行)

と長女の大君を、夕霧の女に対抗させるかの如くに春宮のもとに入れたということと背景としている。「高槐」は高く聳えるエンジュの木で、身分の高い大臣家の意。「槐」は「尊閤挺自翰林」超昇槐位、「三善清行」奉菅右相府一書『本朝文粹』卷七・187の意で大臣を表わし、大臣の家柄を槐門と称することも一般的なこと。彼の父(故致仕の大臣。昔は頭中将とも呼ばれた光源氏のライバル)、更にその父も周知の通り左大臣であったことが喚起される。「紫綬」は大臣などの貴臣が帯びる印綬で、その位を表わす。「漢書百官表曰、相国秦官、金印紫綬、掌丞天子、助理万機」(『芸文類聚』卷四五・相国)「漢書百官表曰、丞相秦官、金印紫綬、掌丞天子、助治万機。秦有左右、高帝即位置丞相」(同上、丞相)とあり、「金章紫綬看如夢」(新昌閑居招楊郎中兄弟)『白氏文集』卷五五)他白詩によく見え、「金印紫綬之貴臣、規模茂真而飄袖」(秦氏安(藤原雅材)「弁散樂」对策)『本朝文粹』卷三・94)と本朝でも用いられる。「穠李」は美しくかぐわしい桃李の花(の如き人)。「穠」は「穠」に同じく、盛んなる様。「毛詩」(召南「何彼穠矣、華如桃李」)などとあるのはよく知られ、「緘手細腰、受之父母、軟雲穠李、備于髮膚」(賦「春娃無氣力」詩序)『昔家文草』卷二『本朝文粹』卷九・236)と用いられている。白詩で「穠姿貴彩信奇絶、雜卉乱花無比方」(牡丹芳)『白氏文集』卷四)と詠む含意とかわらない。「青閨」は東宮の居処。白詩にもよく見える「青宮」(『初学記』卷一〇・皇太子参照)に同じ。「方今講芸之場者、是外祖大相国之旧居也。昔為黃閣、今為青閨」(大江匡衡「冬日陪東宮」聽第一皇孫初讀「御注孝經」詩序)『本朝文粹』卷九・258)と見えている。

頸・尾聯は、大納言が自邸の寝殿の東面(宮の御方の居処)の軒光にかぐわしく咲く紅梅を、若宮を通して句宮に届けさせる場面、

この東のつまに、軒近き紅梅のいとおもしく匂ひたるを見たまひて、「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿宮内裏におはすなり。一枝折りてまゐれ。知る人ぞ知る」……ついでの忍びがたきにや、花折らせて、急ぎ参らせたまふ。「いかがはせん。昔の恋しき御形見にはこの宮ばかりこそは。仏の隠れたまひけむ御なごりには、阿難が光放ちけんを、二たび出でたまへるかと思ふさかしき聖のありけるを。閨にまじふはるけ所に、聞こえをかさむかし」と

心ありて風のにははす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき

と紅の紙に若やぎ書きて、この君(大夫の君)の懐紙にとりませ、押したたみ

て出だしたてたまふを……。

(⑤47頁14行、49頁5行)

とある件が背景と言えよう。「梅」に娘の中の君、「鶯」に匂宮を擬し、詩中の「竹園」は物語本文中には見えないが、宮の御方を暗示する。勿論梅に鶯というのが定番だが、「御苑生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ」(『万葉集』4310大伴家持)「竹近く夜床寝はせせ鶯の鳴く声聞けば朝寝せられず」(『後撰集』48藤原伊衡)等の如く竹に鶯もあり、後に「竹近聞鶯」「竹中鶯」「竹籬聞鶯」「竹林鶯」「隣家竹鶯」の歌題も見えており(瞿麦会編『平安和歌歌題索引』一九八六年)、本詩のような表現に至ったものであろう。鶯(匂宮)が訪れるのは梅(中の君)のはずであったが、竹(宮の御方)ということもあったのだという含意で、詩作者は「竹園」を用いた。その一方で、実は『河海抄』(紅梅)に引かれる「春風北戸千茎竹、暁日東簷一樹花」(白居易「北亭招客」『千載佳句』卷上・春興35。那波本『白氏文集』卷一六の本文では「暁」を「晚」に、「簷」を「園」に作る)の句も注意される。その注により「竹園」に作ったかという見方もできなくはない。確かに下の句も「この東のつまに軒近き紅梅」に頗る近似し、「竹」と「花」の対語も似ているが、この白詩句は鶯とは全く関わりない。従って先の白詩のみで本詩のような表現になるのはやや苦しいように思う。恐らく先の和歌の先例も詩作者の脳裏にあったのではなからうか。「風牽」は風が導く、ひきこむ、招くという意で、「月低儀仗辞蘭路、風引筋簾入柏城」(『開成大行皇帝挽歌詞四首』其四『白氏文集』卷六八)「薬治沈痛纒旬日、風引遊魂是九泉」(『夢阿満』)「菅家文章」卷二とあるに同じ。ここは平仄の関係で「牽」(平声「引」は仄声)を用いた。「梅艶」は梅花の芳しく美しい様子。「望鶴晴飛二千里」思「梅艶発九重門」(『聞群臣侍内宴賦中花鳥共逢上春……』)「菅家文章」卷四)「梅艶先春紅始綻、竹叢凌雪緑猶深」(藤原茂明「冬日即事」『本朝無題詩』卷五・330)などに見える。「岐分両廻首、書到一開眉」(偶作寄朗之)「白氏文集」卷七一)「一封書到自京都、滿紙公私説向偶」(『読家書有所所歎』)「菅家文章」卷四)は「書到」(手紙が届く、便りがやってくる)の例。「野日初晴麦隴分、竹園村巷鹿成群」(盧綸「早春歸藍屋寄耿湓李端」)「還似漢皇連句宴、竹園槐府率群臣」(『賦所貴是賢才』)「江吏部集」卷中)は「竹園」の語例。

尾聯の背景は前述参照。「倩憶」はよくよく思う、想い起す意。「倩」は平安朝詩文にはよく用いられている語。「倩憶他時携三片影、豈如今夜賞三餘光」(藤原

茂明「八月十五夜翫月」『本朝無題詩』卷三・142)とある。六如上人『葛原詩話』(卷二・倩)は「倩ノ字ヲツラツラトヨム。和書ニ往々アリ。梁ノ庾肩吾ガ詠桂ニ、新叢入三望苑、旧幹別三層城、倩見今移処、何三如月裡生。同人歳尽ノ詩ニ、梅花応レ可折、倩為三雪中看」ト。コノ倩ノ字ツラツラトヨムベキニ似タリ。ツラツラハ熟ノ字ヲ用ユ。字書倩ノ字ノ注ニ熟ノ義ナシ。追考ヲ待ツ。或人曰、倩ノ字ノコト、南郭ガ遺契ニ出ツト。予ガ所見暗ニ合セリ。肩吾ノ詩、前ハ佩文咏物詩選、後ハ王氏詩教三ニ載ス。蕉中師ノ曰、ツラツラハツマビラカノ意ナリ。倩ハヤトフノ字義ナレバ、借問ナドノ借ノ意カトオモハル。倩視モ試看ノ義ニ近カルベキカ。然シ和ノ古書ニモ、倩ヲツラツラト訓ズル多シ」と説いているが、津阪東陽『葛原詩話糾謬』(卷二・倩)では、謝偃・上官昭容・皇甫汭らの詩の「倩看」「倩語」「倩教」の例から「ココロミニ」と訳すべきだと指摘している。「貴種」は高貴な家柄の生まれ。「士不レ必賢世、要ニ之知レ道、女不レ必貴種、要ニ之貞好」(『史記』外戚世家)「王侯將相、寧有種乎」(同上、陳勝世家)などとあり、「高才未ニ必貴種、貴種未ニ必高才」(『応下補文章生并得業生復旧例上事』)「本朝文粹」卷二・64)「將相貴種、宗室清流」(菅原道真「辞右大臣第二表」)同上卷五・119)などと本朝でも用いられている。「阿難」は釈迦に近侍して十大弟子の一人に挙げられ、多聞第一と称された。釈迦が涅槃に入った後、高座に就き説法したところ、さながら釈迦の如くで、光明を放ったという逸話(早く『河海抄』は「大智度論」を引くが、『増一阿含經』によるとの説もあるようだ)に依っているとされる。猶、阿難については『宝林伝』(卷二)『祖堂集』(卷一)『景德伝燈録』(卷一)等に伝が見えている。

四十五 竹川(同二)

四位侍従年十四	四位の侍従	年十四なり
黄鸝誘引撫朱絃	黄鸝 <small>くわうりう</small> に誘引せられて	朱絃 <small>しゆせん</small> を撫す
困棋争手花為賭	困棋 <small>くわんき</small> にて手を争ひ	花 <small>はな</small> もて賭 <small>か</small> と為す
奇石倚身苔代筵	奇石 <small>きせき</small> に身を倚 <small>よ</small> せ	苔 <small>こけ</small> もて筵 <small>むしろ</small> に代えたり
鶉侶踏歌蘭省裡	鶉侶 <small>うづり</small> の踏歌は	蘭省 <small>らんしやう</small> の裡
龍宮拝賀律門前	龍宮 <small>りゆうきゆう</small> の拝賀は	律門 <small>りつもん</small> の前
清禁月夜御階下	清禁 <small>せいぎん</small> の月夜	御階 <small>ごかい</small> の下
藍水醉中間竹川	藍水 <small>らんすい</small> に酔 <small>よ</small> ふ中	竹川 <small>たけがわ</small> を聞く
(七律。絃・筵・前・川(下平声先韻))		

巻名は末句に詠まれている。この巻は、故鬚黒大臣家に仕えていた老女が、その遺族（尚侍玉鬘の周辺）の状況が一変した様を語ることに始まる。父や光源氏といった後立てを失った玉鬘が二人の娘（大君・中の君）の縁付きを思案していると、冷泉院や蔵人少将（夕霧と雲居雁の息）からの申し入れがある。その一方で、また、彼女は光源氏の形見とも言わなければならない。玉鬘は正月に邸を訪れた夕霧に大君の件を相談。その夕方に薫が訪問し、その優美な物腰に人々は心を奪われる。その下旬にも彼は来訪し、催馬楽の「梅が枝」を謡い、促され和琴を奏すると、玉鬘は亡き兄柏木の面影を見出すのであった。三月桜の盛りの頃、囲碁を楽しみくつろぐ大君・中の君達を、蔵人少将は覗きみて、大君に心を寄せるが、彼女が冷泉院に輿入れすることになり落胆、魂の抜けたような有様となり、母雲居雁も涙せずにはいられない。大君には薫も未練を残していた。今上帝も院への出仕には御不満で、大君の兄（中将）を問詰めている。彼は母を責め立てるが、院の大君に寄せる寵愛は並々ならぬものあり、遂に御懐妊に至るのであった。年改まり、男踏歌に、薫は歌頭、蔵人少将も楽人に加えられる。冷泉院での披露では、蔵人少将は定番の「竹河」を謡い、やがて参上した薫も院（和琴）や御息所（箏）らに琵琶を合わせ奏でた。四月に大君が女宮を生み、後には今宮を設け、中の君は母から尚侍を譲られ、今上帝に入内する。やがて大君に思いを寄せていた薫や蔵人少将も栄達し、各々中納言や参議となる。薫が玉鬘のもとに挨拶に参上すると、彼女は大君が周囲との付合いに悩んでいると語る。彼女の邸の隣りの紅梅右大臣（故柏木の弟。北の方は真木柱）の新任祝いの大饗には多くの人が参集したが、彼は匂宮や薫を婿にと考えていたのであった。一方、玉鬘は宰相中将（蔵人少将）の訪問を受け、その華やかな姿を見るにつけ、自分の子息の遅滞が歎かれてならないのだった。以下聯毎に訳すと次のようになるだろう。

四位の侍従におなりの薫様は御年十四歳でございます。（正月下旬玉鬘邸を訪れました）薫様は、まるで鶯にでも誘われるように、（ゆつたりとした心持ちになられ、差出された）和琴をかき鳴らしなされたのでございまして。

（三月の桜下、玉鬘様の御邸では大君・中の君の二人が）碁を打ち興じておりました。（昔から二人で争っておられました庭の）桜を賭け物として競っていらしたのでございまして。また、（大君様が院に参られた後、院を訪れた薫様は大君の兄藤侍従とそぞろ歩きをして、彼女のお部屋近くで、藤の咲きかかる五葉松を御覧になり）池のほとりの石に身をお寄せになり、苔を敷物といたしたのでございまして。

（年改まり）殿上の若君達による男踏歌が宮中で行われたのでございまして（が、薫様や蔵人少将様も選ばれて参加されました）。（さて、それから年月もたち、薫様や蔵人少将様も各々貴位に昇進されましたが）中納言におなりの薫様が昇進御礼の御挨拶に参上致しまして、玉鬘様（が葎の門と仰っしゃる）の御前（の庭）で再拝して舞踏されました（のはいかにも慶賀にたえないものでございまして）。

（男踏歌が行われて、十四日の）月が明るく澄んでいる夜、（帝の御前から）薫様は冷泉院（に移動して、その）の階段の下にお寄りになり、御酒に酔いつつも、「竹河」を謡われ、（人々も一年前の正月の玉鬘邸でも「竹河」を謡われませんでしたことも思い出しつつ）お聞きになつていたのでございます。

首聯第一句は、尚侍玉鬘が四位侍従薫を故光源氏の形見と思っている件、

六条院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君、冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位侍従、そのころ十四五ばかりにて、いとまきは幼かるべきほどよりは、心おきておとなおとなしく、めやすく、人にまさりたる生先しるくものしたまふを、尚侍の君は、婿にても見まほしく思したり。

（53頁9～14行）

を背景とする。第二句は、正月「二十余日のころ、梅の花盛りなるに」（50頁11行）、薫が玉鬘邸を訪れ、寝殿の西の渡殿で「梅が枝」を口ずさみつつ宴に加わってゆくあたりが背景となっている。

内より和琴さし出でたり。……尚侍の殿、「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひたまへると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなん。今宵は、なほ鶯にも誘はれたまへ」とのたまひ出だしたれば、……をさをさ心にも入らず掻きわたしたまへるけしきいと響き多く聞こゆ。

（51頁12行～72頁2行）

と、薫は玉鬘に促されて琴を奏でたのであった。「黄鸝」は「黄鸝（ウクヒス）」（『色葉字類抄』と訓む。「翅低白雁飛仍重、舌洪黄鸝語未成」（『南湖早春』）『白氏文集』卷一七）他白詩にも見え、「不レ容粉妓偷看取、应レ叱黄鸝戯踏傷」（『早春侍宴同賦「殿前梅」』『菅家文章』卷六）ともある。この鶯と「誘引」（さそわれ

て)のつながりと言えば特に古注の類に依らずとも、誰しも「鶯声誘引來_二花下_一、草色拘留坐_二水辺_一」(「春江」『白氏文集』卷一八『千載佳句』卷下・春遊⁸⁵³)『和漢朗詠集』卷上・鶯67)を想起せずにはいられない。かの句は早く大江千里『句題和歌』(『千里集』2)や菅原道真詩(『詩友会飲同賦』鶯声誘引來_二花下_一)菅原文草』卷六『扶桑集』卷一六)といった寛平期の詩歌の句題に用いられた人口に膾炙する名句である、また、「朱絃」はここでは琴のこと。「同_二朱絃之清汜_一」(陸機『文賦』『文選』卷一七)の李善注に「礼記曰、清廟之瑟朱絃而疎越。……鄭玄曰、朱絃、練朱絃也」、劉良注に「文有_三專尚_二清約_一而質樸者、則如_二大羹_一不_レ和_二五味_一、同_二朱絃之清音_一也。……清廟之瑟、朱絃而声淡雅」などと見え、白居易もこれをふまえて、「朱絃疎越清廟歌」(『五絃彈』『白氏文集』卷三)「玉軫朱絃瑟瑟微」(「聽_レ彈_二湘妃怨_一」同上卷一九)他よく用い、本朝でも「玉管朱絃脆也清声々莫_二是_一不_二秋声_一」(菅原文時「秋声脆」管絃)『天徳闈詩』と絃楽器の意で使われている。

頷聯第三句は、三月の桜の時節、玉鬢邸で大君と中の君が「碁打ちたまふとて、さし向かひたまへる……碁打ちさして恥ぢらひておはさうずる」(⑤76頁3〜12行)に続く場面、殊に訪れた兄君達(中将と右中弁)が語らいを終えて立ち去った後の、

中将など立ちたまひて後、君たちは打ちさしたまへる碁打ちたまふ。昔より争ひたまふ桜を、賭け物にて、「三番に数一つ勝ちたまはむ方に花を寄せてん」と戯れかはしきこえたまふ。

(⑤79頁1〜4行)

あたりを念頭に置いていよう。また、第四句はかなり飛んで、大君が冷泉院に入った後、未練を残す薫が、彼女の部屋近くに立ちやすらう件、

夕暮のしめやかなるに、藤侍従と連れて歩くに、かの御方の御前近く見やらるる五葉に藤のいとおもしろく咲きかかりたるを、水のほとりの石に苔を席にてながめりたまへり。

(⑤92頁9〜11行)

が背景になっていよう。「囲碁」は囲碁とも。中国では堯が造ったとも言われ、古くから(兵法とも絡んで)知的遊戯として広く楽しまれ(『芸文類聚』卷七四・

囲碁等参照)、本朝にも早く齎され、积弁正は玄宗在藩の時に囲碁の能力により賞遇され(『懐風藻』)、『吉備大臣入唐絵巻』には真備が唐人と対局する様が描かれ、正倉院には本朝最古と伝える碁盤も残り、平安時代には貴族の間に流行していた(大曾根章介「平安朝文学に見える囲碁」『日本文学論集』第三卷、汲古書院、一九九九年)。「唯共_二嵩陽劉旭士_一、圍_レ碁賭_レ酒到天明_一」(劉十九同宿)『白氏文集』卷一七)は参考例。「賭」はかけて勝敗を争うこと。「是小弓事歟、懸物何珍哉。……懸物銀鞍云々」(雲州消息)卷上本)とも見える。「争手」は碁石を置く一手一手の先を読み、妙手を追求するゲームだから言い、「晋蔡洪圍碁賦曰、命_二班爾之妙手_一……或声手俱發」(梁武帝圍碁賦曰、今一碁之出手)「梁沈約碁品序曰……支公以為_二手談_一、王生謂_二之坐隱_一」(『芸文類聚』卷七四・圍碁。この故事は『語林』や『世説』にも見える)などである。「奇石」は「崦山多_二靈草_一、海浜饒_二奇石_一」(江淹「雜體詩三十首」其一七『文選』卷三一)とあり、見映えのする珍しい石や岩のこと。「倚身」は身を寄せる、委ねる。「寒蟬幸得_レ免_二泥行_一、危葉寄_二身露養_一生」(「聞蜂」『菅家文章』卷二)「蝸牛角上争_二何事_一、石火光中寄_二此身_一」(「對_レ酒五首」其二『白氏文集』卷五六『和漢朗詠集』卷下・無常⁷⁹¹)に殆ど同意。

頷聯の第五句は、

その年返りて、男踏歌せられけり。……四位侍従(薫)、右の歌頭なり。かの藏人少将、楽人の中にありけり。十四日の月のはなやかに曇りなきに、御前より出でて冷泉院に参る。女御も、この御息所(大君)も、上に御局して見たまふ。上達部、親王たち引き連れて参りたまふ。

(⑤96頁6〜12行)

とある場面を念頭に置いている。また、第六句は、薫や藏人少将が各々中納言、参議に昇進して、薫が玉鬢邸に挨拶に訪れた条、

この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、……中納言の御よるこびに、前尚侍の君に参りたまへり。御前の庭にて拝したてまつりたまふ。尚侍の君対面したまひて、「かくいと草深くなりゆく葎の門を避きたまはぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなん」など聞こえたまふ、……

(⑤107頁10行〜108頁1行)

と見えるのが背景となつていよう。「鶴侶」は宮中の仲間達の意で、右の文中で云えば、四位侍従・藏人少将・上達部・親王達を指すことになる。「久別鶴侶、深随三鳥獸群」(「黄石巖下作」)「白氏文集」卷一六)「羽林馮翊鶴侶、吏部肥州錦繡詞」(「冬夜与三諸君談話」)「江吏部集」卷上) などというに同じ。「蘭省」は尚書省(太政官)のことも指すが、ここは宮中という程の意。「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」(「廬山草堂夜雨独宿……」)「白氏文集」卷一七)「和漢朗詠集」卷下・山家55)は人口に膾炙した名句で、『枕草子』(77段)にも引用される。「龍官」は宮中の官吏。「紀官(皇甫謐帝王世紀曰、太昊苞犧氏、風姓、有三景龍之瑞、故以龍紀官)」「初学記」卷三〇・龍)「龍師(伝郊子曰、昔太皞氏、以龍紀、故為龍師、而龍名注太皞伏羲氏有龍瑞、故以龍紀事為官)」などに見える(他に『千字文』の「龍師火帝」注参照)他、「庭闕奉晨趨」(李嶠「龍」の注に「一本、西京有蒼龍闕、每旦諸臣趨闕下、乃入朝也」とあることなども想起される。「拝賀」は拝礼し喜びの思いを申し上げる意で、「百寮及新羅朝貢使拝賀」(『続日本紀』文武天皇二年正月一日条)と見える。

尾聯は第五句の冷泉院での男踏歌の場面と一部重なるが、次の条を背景としていよう。

十四日の月のはなやかに曇りなきに、御前より出でて冷泉院に参る。……藏人少将は、見たまふらんかしと思ひやりて静心なし。……竹河うたひて御階のもとに踏み寄るほど、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ、ひが事もしつべくて涙ぐみけり。後の宮の御方に参れば、上もそなたに渡らせたまひて御覽ず。月は夜深うなるまに昼よりもはしたなう澄みのほりて、いかに見たまふらんとのおほゆれば、踏むそらもなうただよひ歩いて、盃も、さして一人をのみ咎めらるるは面目なくなん。

(⑤96頁10行～97頁9行)

などとあり、更に薫は渡殿の戸口で、女房に、

一夜の月影ははしたなかりしわざかな。藏人少将の月の光にかかやきたりしけしきも、桂のかげに恥づるにはあらずやありけん。雲の上近くては、さしも見えざりき。

(⑤98頁4～7行)

と語り、「竹河」を詠込んだ歌の贈答をする場面などが意識されているのではなからうか。「清禁」は「穆々清禁、濟々群英」(傅咸「申懷賦」)「芸文類聚」卷二六・言志)とあり、すみわたった禁中で、宮中を指す。「藍水」は陝西省の藍田谷より流れる川で、中国古典詩にはまみ見えるが、平安朝漢詩の世界では、「戸牖梨花松葉裏、郷国藍水玉山程」(具平親王「唯以酒為家」)『本朝麗藻』卷下)以後見えるすべての例は「藍水ハ酒ナリ」(『文鳳抄』卷六・酒)の意であり、本詩の用法もその独自の表現の系譜を継承していると言つて良い。

(統)

